

アリストテレスの時間論

村上, 恭一

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 人文科学編 / 法政大学教養部紀要. 人文科学編

(巻 / Volume)

28

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

16

(発行年 / Year)

1977-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00005309>

アリストテレスの時間論

村上恭一

序

アリストテレスの時間論 (*teori zborni*) は、主として『自然学講義』⁽¹⁾第四卷において取り扱われている。すなわち、その同じ巻の前半章 (1-6) は、アリストテレスのいわば空間論に相当するもので、そこでは場所 (*topos*) および空虚 (*kenon*) について論究されており、この論究にひきつづいてその後半章 (7-17) において、時間論が恰も空間論の場合のごとくに展開されている。爾来、時間の問題は、伝統的に空間の問題とともに不朽の主題として繰り返し論議されてきた。これを歴史的展望のもとに一瞥すると、アリストテレス以前では、ピュタゴラス学派、ヘラクレイトス、エレア学派、原子論者たち、プラトンなどによる論究を度外視することはできず、また後世においては、プロティノス、アウグスティヌス、トマス・アキナスなどをへて、ルネサンスの自然哲学者たち、さらにデカルト、スピノザ、ライブニッツ、ニュートンにくわえ、カント、シェリング、ヘーゲルとともに、現代哲学の重鎮のうち、なかななくベルグソン、フッサール、ハイデッガー、サルトル等にいたる諸家の一連の論究をあげることができる。これらの試みはいずれも、たんに西洋哲学における時間論の系譜という点において注目に値すると

いうだけでなく、それらが真に哲学上の重要な問題を提起していることは衆目の一致してみとめるところである。時間とはなにか。この問いに答えることは、実に哲学の根本問題に答えることである。アリストテレスの時間論は、ギリシヤ哲学における時間論の集約であるばかりでなく、いま列挙した西洋哲学史上にみる諸家の時間論のなかでも、きわだつて特色のある試みであり、まさに慧眼の成果といつてよい。「時間の概念についての後統の説明は、すべて根本的に、アリストテレスの定義に依存している。」とハイデッガーは書いているが、この言葉になんら誇張はない。それではいったいアリストテレスは時間についてどのような重要な問題を提起したのであるうか。さしあたって本稿では、アリストテレスの時間にかんする見解をできれば逐語的に解釈するとともに、その主要な問題を究明したいとおもう。

I

アリストテレスの時間把握の概観をみるに、それは恰も場所および空虚について検討されたのと同じように、まず第一に、時間が存在するか否かにかんする疑問、すなわち「時間が果たして存在するものどもの部に属するか、それとも存在しないものどもの部に属するか」(*Proteron tou ourou eortu ti tou my ourou*)という問いが立てられる。そしてつぎに、そのあるがままのもの、すなわち「時間の本性はなにか」(*ti ti eortu areta*)という問いがたてられる。⁽³⁾——この第一の問いは、時間の存在様態にかんする存在論的な問いであり、第二の問いに比してかなり簡潔に取り扱われ論旨も晦渋ではない。これに対して、「時間とはなにか」を主題とする第二の問いは、時間の本質にせまつてゆくものであるがゆえに内容がより多岐にわたり、論旨も錯綜している。

さて、第一の問いの生ずる見地からみるに、さしあたって時間は恰も「全く存在しないのではないか、あるいは辛うじてまたはおぼろげに存在するだけではないかろうか」(*Phys. 217 b 32.*)という疑問をひき起こす。時間は一見するに過去、現在および未来から成るところの全体として現われるようにみえる。後述のごとく、時間を構成するその部分は非有であるというのに、いったい時間は全体としていかに存在するのであるか。——われわれは、

まず、(1)時間の存在状態にかんするアポリアに遭遇する。(Phys. 218 a 3.) 過去および未来はともに時間を構成する部分でありながら、前者についていえば、「(かつて)あったが、今はもはやあらぬ」ものであり、後者についていえば、「まさにあるうとしているが、なおいまだあらぬ」ものである。それゆえ、このかぎりにおいて両者はともに非有(μὴ ὄν)なのである。ハイデッガーにしたがえば、この両概念のもつ特性はともに ∇ *Nichtigkeit* ∇ なるものであるから、この点において時間は「恰も互いに異なった非有の方向に差しのべた二本の手をもっている」かのごとくみられる。ついでわれわれは、(2)時間の構成(εἶδος)にもとづくアポリアに当面する。(Phys. 218 a 3-8.) 時間は上述のように部分に分かれたれうるものでありながら、そのいずれの部分も存在するものではない。その間にあって常に存在するのは現在だけであるが、だからといってこの現在の瞬間である「今」(τὸ νῦν)が、時間の現にある部分とみられるわけではない。というのも「今」は時間継起の部分ではない(τὸ ἐκ τῆς αἰτίας ἢ τῆς ἀπορίας)とみられるからであり、またいかにえると時間は現存する諸々の「今」から合成されるのではないからである。「今」はただ過去から未来へたえず交替する移行を形成するにすぎないものとみられる。こうして時間を構成するその部分がいずれも非有であり、また現に存在する「今」が時間の部分でないということがわかったいま、時間は現実には存在しないようにみえる。

ところで、「今」は、すでに過ぎ去った時間とまさに来ようとしている時間とを分断するものであり、いいかえると端的に時間の部分に区切りをあたえるものであるが、そのかぎりにおいて「今」は時間の限界をなすものといふことができる。あるいは「今」は、過去と未来のあいだの媒概念であるといつてもよい。というのも時間経過の中断は不可能だからである。さらにつづいて、(3)この「今」にかんするアポリアが提示される。——ではない「今」は、時間の全体のなかで常にずっと一にして同じに留まるものか、それとも常に他であるのか、というのがそれである。まず、(a)「今」がたえず変化するものであり、常に他であるとしよう。ところで時間のうちにあるそれらのおよそどの部分もすべて同時には存在することはできず、却って順々に連続的に(εἰς ἀλλήλους)存在するものであろう。(ただし、より長い時間がより短い時間を含むというような場合、たとえば一年が一月を、一月が一日を含むとい

うような場合は別である。なぜなら一年、一月、一日は同時に存在しうるものだからである。それゆえ過ぎ去った「今」は、必ずいつか消え去ったものにちがいない。というのも「今ども」が互いに同時に存在することはありえないからである。だがこの過ぎ去った「今」は、かつてはまさしく存在していたがゆえに、自己自身のうちで消え去ることはありえないし、また「今ども」が相互に隣接して存在しえないがゆえに、それは他の「今」のうちで消え去ることもできない。しかるにこの過ぎ去った「今」が「今ども」の中間に存するある他の「今」のうちで消え去ったのだとすると、それはこれらの中間にある無数の「今ども」と同時に存在していることになり、このことはたっただいま述べてきた点からして不可能であり、したがって「今」が常に異なったものでありえないことを示しているといつてよい。また他方において、(b)「今」は常に同一なるものでもありえない。たとえば、可分割的で有限なものはいかなるものも、それを限界づけるものとして、少なくとも常に二つの限界をもたなければならぬ。「今」は限界であるから、有限なる時間の限界をなすものは、二つの「今」であろう。だがもしこの二つの「今」が同一なるものであるとするなら、時間の前後の区別はなくなってしまうであろう。たとえば、一万年前に起こった物事が今日起こっている物事と同時にあるというような不合理なことになるであろう。(Phys. 218 a 9-30.) こうしてわれわれのえた結論によると、「今」は、二つの論証からもわかるように、常に変化するものでもなく、また常に同一にとどまるものでもないということである。

上述のごとくわれわれの遭遇した三つのアポリアは、これを要約するに、まず時間はロゴスによって語られ思惟されるものであるがゆえに存在しなければならぬが、しかし非有を部分とする時間が存在することはいかにして可能であるかという時間の存在性にかんするものであり、つぎにいまひとつは時間の構成ないし形態にまつわるものとみられ、さらには「今」の本質に附随する多様性より必然的に生じたものといふことができる。

これらの穿鑿をつうじて、われわれがこれまで時間にかんして知りえたことを約言してみるに、まず時間は果てしなきものであるが、時間自身のある限られた部分もまたやはり時間だということ、また時間は「常に可分割的なものどもへと可分割的である」(*διαίρετον εἰς ἀνά διαίρετον*)といふかたちで「連続的」(*ἀσυνεχές*)なるものだと

いうこと、さらにまた時間は可分的でありながらその部分である過去および未来はともに非有であり、時間のうちにある時間的「限界」(ὄρασμα)として存在するところの「今」は、しかしまさに限界として時間の部分ではないということ、しかも時間の部分はすべて連続的に(nacheinander)存在するものであって、いずれも同時には存在しえないということ、——あらまし以上のようにいうことができるであらう。

II

つぎに第二の問いについて検討することにしよう。——「時間とはなにであるか、その本性はなにか」(τὸ εἶδος τοῦ χρόνου κατὰ τὴν ἀνάγκην τῆς φύσεως)ということ、すなわち時間の本質にかんする問題である。われわれは時間の論究にさいして、まずこの問題にまつわるアポリアの検討からはじめたが、これらの論究よりえられた帰結は、ちよくせつ当面の問題である「いったい時間とはなにか」という問いにまだ答えるにはいたらなかった。この問題は、たしかにアリストテレスもみとめているごとく、先人の諸見解をもつてしてもあきらかでないほど晦渋であるとみられよう。

ところで、いまアリストテレスが時間について先人の諸見解として論評するとき、常にかれが念頭においていたのは、ピュタゴラス学派の論究もさることながら、なかならずプラトンの時間論であったにちがいない。すなわち、「(a)あるひとは時間を全宇宙の運動(ἡ τοῦ κόσμου κίνησις)であると主張し、(b)あるひとは、天球そのもの(τὰ ἀστέρα κίνησις)が時間であると主張している。」とアリストテレスは書いている。かれはこの箇所において先人の名を明記していないが、前者にかんしていえば、あきらかにプラトンの時間論を指していったものであらうし、また後者についていえば、おそらくピュタゴラス学派の時間観を念頭においていたものとみられる。まず天体の運行をもって時間であるとする説(a)についてみるに、それはつぎの二点からただちに不合理であることがわかる。すなわち、(i)天体運行の部分はそれもまたなんらかの時間ではあるが、しかし時間が天体運行ではないということ。というのも、たとえば日・夜というような時間の断片(部分)は天体運行のある部分ではあるが、天体運行そのもので

はないからである。(ii)もしも多数の天体が存在するとして、しかも時間を天体の運行とみるかぎり、これらの各々の天体の運行がごとごとく時間であることになってしまふ。そうすれば多数の時間が同時に存在するという不都合を生ずる。けだし時間はただ一つしか存在しないものだからである。(Phys. 218 a 33-b3ff.) このようなわけで、この箇所(α)は表面ではいとも簡単に本文から斥けられているようにみえるが、実際にはアリストテレスによるプラトンの時間論批判のドキュメントとして思いのほかふかい意味をもっているのではないだろうか。——つぎに天球そのものが時間であるとする説(β)をみるに、その根拠たるや、万物が「時間のうちに」存在していると、かつまた万物が「天球のうちに」も存在しているがゆえに、ただそのことをもって時間とは天球であると主張したまでのことである。(10)このような点からして、このピュタゴラス学派の時間考察は、あまりにも素朴的(εὐθεταίως)なる解釈であるがゆえに時間の本質にせまってゆくほど含蓄のあるものでなく、ただちにこの討論の場から斥けられてしまふ。

それでは時間がプラトンのいう天体運行のときのものでありえないとすれば、つぎに(θ)時間は運動(κίνησις)のようなもの、ないしは一種の転化(μεταβολή)であると解されまいだろうか。われわれは日常生活のなかで常に時間の経過を問題にし、よく「時は過ぎ去る」などといったりする。この考えをあえて規定するならば、それはいまい時間運動ないしは変化とみる考え(θ)にもとづくものといえるかもしれない。さすればここにもみる考えがもつとも通常の時間についての考えであるようにみえる。しかるにこの考えをよく検討してみるのに、つぎにいうような二つの理由からこの考えもまた正当なものでないことがわかる。まず、(i)各々の事物の転化や運動は、ただその転化する事物そのもののうちにのみ(ἐν αὐτῷ ἐν μεταβολῇ)存するということ、いいかえると、それはまさに運動したり転化したりする事物そのものがあるところのみ存するものだということである。しかしながら時間は、アリストテレスによると、むしろ「等しく、あらゆるところに、またあらゆる事物とともにある」(ὅσα ἄπαντα οὐκ ἂν καὶ πανταχοῦ καὶ παντὶ παντα)とみられる。つぎに、(ii)運動とか転化には常に遅速の差別があるが、時間はその差別はない。というのも、たとえば「速い」というのは短時間に多く運動すること、「遅い」というのは長

時間に少し運動することであるが、すなわちこのように遅速というのは、むしろ時間によってはじめて規定されるものであるが、しかし一方時間は時間によって規定されるものではないからである。つまり時間は、たんに量とか質によって決定されるものではないとみられる。——ここにおいて、この二点から、時間とは運動ないし転化であるとする見解は崩れることになる。したがって「時間は運動ではない」(*ὅτι μὴ κίνησις ἢ μεταβολή*) といわれるのである。(Phys. 218 b 10-18)

以上のごとく、われわれはまたしても「時間とはなにであるか、その本性はなにか」というこの時間の本質にまつわるアポリアの淵につれもどされた。

III

いったい時間は前述のごとく運動ではないにしても、とにかく時間は「転化なしにはありえない」(*ὄχι ἄνευ μεταβολῆς*)であろう。というのも、ひとは自らの意識においてその一連の精神状態になんらかの変化をもたらせないかぎり、また実際に変化が起こってもこれを意識しないかぎり、その間に「時間が経過した」(*ἔγρηται χρόνος*)とおもわれないからである。アリストテレスはこれを例証するのに、神話中の一エピソードをひきあいに出して、恰もサルディニアの英雄どものところで深き眠りにおちいつていたひとたちは、目ざめたとき、共通の感覚(*ἀταρῆτος κοινὴ*)による「前後」の知覚を失していたがために、「時間が経過した」ことを知らなかったかのごとくである、と説明している。なおこの場合について附言するなら、かれらは眠りこむ直前の「今」と目ざめた直後の「今」との中間のこともをなんら経験していないことのゆえに、中間をすべて抹消し、「前・後」の今どもを結びあわせて、一つの「今」にしているということができる。(Phys. 218 b 23ff.) ちなみに、いかに「今」が静止し、同一で常に異ならないなら、時間は存在しないであろうし、また「前後」の今の差異ないし変化に気づかなければ、やはり時間は存在しないといえる。なお逆の点から、ひとがなんらかの転化を知覚し識別するとき、はじめて「時間が経過した」というのであるかぎり、そしてそのとき時間が存在するといわれるのであれば、時間

はたしかに転化なしにありえないこと、これまた明白であろう。先にみたところでは、時間そのものは運動ではないということであったが、いまみるところからすれば、時間はなるほど運動ではないが、さりとて「運動なしに存在するものでもない」(*ohne kinyasōs ōr' deū kinyasōs*)ということがわかる。すなわち、時間はなんらかの意味において運動と関係せるものとみられるわけだが、それでは時間とはいったい運動のなになのであろうか。われわれは暗闇のなかでなにものをも知覚しえないときでさえも、心中になんらかの動き (*kinyasōs*) を生ずれば、それと同時にわれわれは時間を意識する。このところからして、運動と時間は同時に感知されるということができる。そこでアリストテレスはつぎのように推論する。「時間は、運動そのものであるか、運動のなにかであるか、そのどちらかである。ところが、時間は運動そのものではないから、それは運動のなにかであること必然である。」(Phys. 219 a 9.)

時間は運動ではなく、「運動のなにか」(*τῆς κινήσεως ἐν*)であるといわれるが、それは運動との関連のなかにあるものという意味である。上記の点からして、じつさいハイデッガーも指摘していること⁽¹⁾、時間の本質にかんする問題は、詮ずるところ、「時間は運動のなにであるか」(*τί τῆς κινήσεως ἐστίν*)という問いに集約されよう。

ところで、アリストテレスにしたがえば、「運動するものはあるものからあるものへ運動する」(*ἐκ κινήσεως ἐκ τινος εἰς τὸ*)ということであり、概してあるものからあるもの⁽²⁾にいたる大きさはすべて連続的であるから、運動は大きさに対応するといわれる。すなわち、このように大きさが連続的であるからして、運動もまた連続的なのであり、時間は運動と不離の関係にあるから、これまた連続的であるとみられる。そこでひととは概して、「運動がどれだけあったとき、これに応じて時間もまた常にそれだけ経過した」ことをみとめるであろう。ところで、運動は連続であるといわれるが、ここにいう連続性というのはほんらい空間の固有性なのである。(もつとも、アリストテレスによれば、場所の固有性といった方がいいかもしれない。)だから、運動は自らのうちに常になにかを包含しており、このものによって運動は空間的な隔たりのなかで一方から他方へ、また前から後へと広がるものとみられる。運動はなにかからなにかへと運動するとアリストテレスがいっているのも、実はこのような意

味においてなのである。したがって運動の「前・後」(προτέρων καὶ ὑστερόνων)は、まず第一義的には場所(τόπος)における前後だということになる。「前後」はなにかからなにかへの大きさのうちにもあり、したがって運動にもまたこの大きさにおける「前後」に応じた前後があるわけであり、しかも時間と運動は常に互に対応しているから、とうぜん時間のうちにもまた「前後」があるとみられるであらう。ただし、運動における「前後」は、その基体からすれば、運動そのものであるが、「前後」のあり方という点では運動とは別であり、運動ではないということができる。(Phys. 219 a 10-19ff.)しかしわれわれは、運動を恰も「前後」により限定するとき、まさしく時間を認知するといわれる。だからわれわれは、運動のなかで「前後」を知覚するとき、「時間が経過した」というところでわれわれは、「前後」を「今」との関係において識別しようとする。すなわち、われわれは「前後」の両端の項を中間のもの(μεσότητις)とは異なったものと考え、そこで「今」は一つでなく前の今と後の今の二つであると主張する。そしてそのとき、われわれはこれが時間だということである。というのも、時間は「今」によって限定されるもの(τὸ ὁρισμένον ἐφ' ἑαυτὴν)と考えられているからである。

こうして、いまや時間は運動のなにか特性アイディオンとみられ、運動のなかに「前後」を知覚するとき、われわれはそこに時間があるという。——いわゆるアリストテレスの時間論の定義の基盤はこうして得られたのである。すなわち、アリストテレスはつぎのようである。「時間とはまさにこれ、すなわち、前と後にかんしての運動の数である」(ἡμεῖς γὰρ λέγομεν τὸ χρόνον ἀριθμὸν κινήσεως κατὰ τὸ πρότερον καὶ ὑστερόν. Phys. 219 b 1ff.)

さて、この定義の意味するところを本文に即して検討してみよう。すでにみたように、本来は場所にかんする「前後」の概念を時間の概念としてもちいて運動を限定し、そしてこの運動のうちに時間的「前後」を感知するとき、われわれはまさに時間の経過を知るとともに、そこに時間が存するといえる。このようなわけで、時間は、単なる運動ではなく、却って「数をもつもの」としてのかぎりにおける運動といわれるのである。その証拠にわれわれは、ものの多少を数により判別するが、運動ないし変化の多少についてはこれを時間により判別するであらう。だから、時間はある種の数だということになる。それではいったいこの場合の数(ἀριθμὸς)とはなにを意味する

のであろうか。アリストテレスによれば、数には二義あって、「数えられるもの、ないし数えられうるもの」(*ἀριθμητικὸν καὶ τὸ ἀριθμητὸν*)と、「それによってわれわれが数えるもの」(*ἡ ἀριθμητικὴ*)とに区別せられる。いま時間が「運動の数」であるといわれるときのこの数は、数えられるものとしての数のことである。⁽¹⁸⁾ (Phys. 219 b 8.)

ところで、運動はたえず変化し常に他であるが、恰もそのように時間もまた常に流転し他になるものといつてよい。ただし多くの運動のなかに同時にある時間はすべて一様にして自己同一的であるといわれる。この点からわれわれは時間にかんしてつぎのようにいいうる。一方において、(a)時間は常に同一であるということ、すなわち、恒常的に現在があつて、その背後に常に過去があり、そしてその前方には常に未来があるということ。また他方において、(b)時間はたえず流転し常に他であるということ、つまり時間はつぎつぎに流転して他の時間に連続してゆくということ。——いまいうこのことは、「今」(*τὸ νῦν*)の本質から基礎づけられるであろう。(a)「今」は、それがいつかあつたものと同ーである。というのも「今」はそれがあるかぎり現在であり、しかもそれは常に現在だからである。「今」は決して未来にはならず、却つて未来のものが現在になるのである。現在には常にそこにあつて、しかも唯一のものなのである。しかるに、(b)「今」の存在は常に他なる存在である。各々の時間点(今)は、まさしさあつては未来であつたわけで、それが現在にいたり、ついで過去へと過ぎゆく。そしてまた現在は過ぎ去つたところから到来して、常に他なる時間点(今)をへて未来のものへと移行してゆくといわれる。⁽¹⁹⁾——このような「今」にかんする穿鑿をアリストテレスはおよそつぎのように表現したのであろう。

「……『今』は、まさにその当のものとして同じである、——ただしそのどうあるかは異なるが、——そして、この『今』が、時間に前と後との区別があるかぎり、そのかぎりでの時間を区別するのである。だから『今』は、ある意味では同じであり、ある意味では同じでない、すなわち、あるものうちにありまた他のものうちにあるものとしてのかぎり、『今』は常に異なるものであるが、しかしまさに当のものとしては、同じものである。」

(Phys. 219 b 10ff.)

この文中にみられるとおり、アリストテレスは「今」について「その当のもの（基体的存在）」(ἐκείνου)と「そのどうあるか(規定的あり方)」(τὸ εἶναι αὐτοῦ)とを区別することにより、前者においてその同一なることを、そしてまた後者において常に他であることを説き、「今」をめぐって展開される弁証法的な問いに答えようとしたといつてよい。なおまた同じように、「運動する当のもの」⁽¹⁵⁾(τὸ κινεῖσθαι)によってわれわれはその運動を意識し、またこの運動における「前後」を知覚するといわれるが、いまいうこの「運動する当のもの(当体)」は、まさにその基体的存在としては常に同じものであるが、ときにはここにあり、ときにはかきこにあるものとしてのかぎりにおいては、すなわち規定的には常に異なるものとみられる。恰もリュケイオンにおけるコリスコスと市場におけるコリスコスとは別である(異なる)とみられているように⁽¹⁶⁾。(Phys. 219 b 21.)

時間が運動と不離の關係にあることは一目瞭然であるが、恰もこのように「運動する当のもの」には「今」が対応するであろう。というのも、上述のごとく、「運動する当のもの」によってその運動における「前後」が認知され、こうして前と後が数えられうるものであるかぎり、「今」が存在するからである。「今」は、運動のなかでは前にありまたは後にあるものだが、かく前にあつても後にあつても、「今」の本質における基体は常に同一であるといつてよい。ただし、前と後が数えられうるものであるかぎり、「今」は事実上数えられうるものとして存在するから、その規定的あり方としては、常に同一なものではないといえる。このような含みをこめてアリストテレスは、「それゆえに、『今』は、ある意味では常に同じものであり、ある意味では、しかし、同じものではない。」(Phys. 219 b 31.)と重ねて述べたのであろう。無規定的な「前後」としての「今」は、いわば可能態(ἰσχυρισμός)としての「今」であり、この点で常に同一なる「今」であるが、ひとたびこのころないし理性が、「前後」を数えて(前の)「今」、(後の)「今」というとき、同一なる「今」はこの「今」として、いわば現実態(ἐπιτηδεύματα)としての「今」の境地をうる。すなわち、「今」はこの「今」あるいはあの「今」として限定せられ、それゆえ(前の)「今」と(後の)「今」とが同一でなく常に他であることがいわれるのである。先にアリストテレスによって提示された「今」にかんするアポリア、すなわち「今」は常に同一でありうるか否かという問題は、い

まや「今」を基体的存在と規定的存在という二つの側面から区別して考察することによって解明されることとなる⁽¹⁷⁾。

上述の点からして、時間が存在しなければ「今」も存在せず、また逆に、「今」が存在しなければ時間も存在しないということは明白である。「すなわち、時間が運動の数であるのに対し、『今』は運動している当のもの、いわばその数の単位のようなものだからである。」(Χρόνος μὲν τῆς τῆς φύσεως ἀκίνητος, τὸ δὲ νῦν αἰὲς τὸ φερόμενον, *of our world's epoch*, Phys. 220 a 3 ff.) また、時間が連続的 (συνεχῆς) であるのは、実に「今」によってであり、時間が分割されうる (σχιζόμενος) のも「今」においてであるといわれる。このように、「今」は、時間を結合したり分割したりするという二重の機能をもっているとみられる。「移動しているもの」としての「今」が、恰も一つの運動を前と後に限定区分するといわれるとき、また「今」は、いわば「点」(σημεῖον) に対応するといつてよい。というのも、「点」もまた「線」(γραμμή) を一方では連続させもするし、他方ではこれを限定区分しもあるからである。現にあるものとしての「今」は、すなわち未だあらぬもの (τὸ μέλλον) からまはやあらぬもの (τὸ παρελθόν) へと移行するものとして、いわばすべての時間を自己のうち⁽¹⁸⁾に包含するところのものである。しかるにまた「今」は、運動しているものがその運動をなし続けているがゆえに、常に同一でなく異なるのである。また繰り返すことになるが、こころないし⁽¹⁹⁾理性が前と後を異なるものとして、「今」、「今」と数えるとき、この二つの異なる「今」に囲まれた中間者 (μεσότης) が時間であるといわれる。いいかえると、時間は異なった「今」を限界とする中間者だということである。いまやヌースが数えようとするのは、実はいまいう中間者としての時間にほかならない。「したがって、時間は、数ではあるが、しかし同一なる点が始めてもあり終りでもあるとのゆえに数であるとみられるような意味での数ではなく、かえってむしろ同一なる線の両端のような意味での数である。」(Phys. 220 a 15.)

なお、「今」が時間とどのような関係にあるのか、たったいま述べたことをも含めて一瞥しておこう。

「今」は、先にもふれたように、時間を連続させるもの (συνεχῆς χρόνος) である。もっとはつきりいうと、「今」

は過ぎ去った時間と将来する時間とを連続させるものといひうる。だが同時に「今」は、時間（とき）の限界（かぎ）（*reipas zibosov*）でもある。すなわち、限界であるといひるのは、「今」が時間の終りであるとともに始めだからである。ただし同じ時間のそれではなくて、過ぎ去った時間（*is napavshu zibosov*）の終りであり、また将来する時間（*is puzhau zibosov*）の始めだということである。さらに「今」は、時間を連続させるだけでなく、可能的（潜勢的）に時間を分割しもある。すなわち、「今」は、分割するものとしてのかぎりでは、常に異なるものであるが、しかし連続させるものとしてのかぎりでは、常に同じであるといわれる。「今」は、また一種の「点」のごときものとも解されよう。恰も「点」が線を分割するとき、その「点」は一方の線分の端であるとともに、また他方の線分の端でもあるからである。（*Phys. 222 a 10-17*）しかしながら、「今」は時間のいかなる部分でもない。恰も「点」が線のいかなる部分でもないように。それにもかかわらず、「今」は時間の限界であるかぎり、「時間」そのものではなく、いわば時間に付帯するものであり、「時間のうち」に（*is zibosa*）あるといひることができる。かつてみたように、「今」は時間なしには存在せず、逆に「今」なしには時間も存在しないといひことである。それゆえ、時間の存在性は、「今」に存するといひうる。あるいは同じことだが、時間に存在性もたらされるのは、この「今」によつてであるといひてもよい。いまやこの「今」を吟味することにより、やつと劈頭の懸案であつた時間の存在様態にかんするアポリアは解明されることになる。

過去および未来はともに時間を構成する部分でありながら、両者はともに非有であり、かわつて「今」のみが現在に存在する。しかもその「今」は、過去の終りであるとともに未来の始めでもあるがゆえに、これらの過去と未来の時間をすべて自己のうちに担っている。この点で、「今」は、一つでありながら、同時に二つの側面をもつていふといひることができよう。「今」は、それゆえ過去と未来がともに存在の明るみをもつ場とでもいふべきであらう。「今」は静止する「今」ではなく、むしろ流動する点系列と解するのがよからう。いまや流動する時間のいづこをとつても、そこには常に現在する不可分（*atavation*）なる「今」とこの現にある「今」に担われた過去と未来が存在するであらう。過去と未来はともに非有でありながら、現在する「今」のうちに自らの存在の境地をえて、や

っと「今」に即して両者はともにその存在性を獲得しえたといつてよいであろう。そしてまた、こうして過去および未来を自己のうちに孕んだ「今」を吟味することによつて、計らずも、時間の構成ないしは性質にもとづく残りもの一つのマホリへの通路を見出し出したといひうるであらう。

註

- (1) テキストは、*ちいばら定評のオクスフォード校訂の注解付原典 Aristotle's Physics, a revised text with introduction and commentary by W. D. Ross, Oxford, 1936* を使用した。ただし本稿中に引用した特殊な字句の訳語ならし訳文は、おおむね岩波版「アリストテレス全集」③『自然学』(出隆・岩崎允胤訳)に依拠した。なお本文中の引用箇所には *Phys.* の略語とともにそのページ数を示した。
- (2) Heidegger: *Sein und Zeit*, S. 421.
- (3) Aristoteles: *Physica*, N. 10, 217 b 31—32.
- (4) Heidegger: *Die Grundprobleme der Phänomenologie*, (Gesamtausg. Bd. 24.) S. 331.
- (5) 因らるゝ点に於ては、マウヌス・マウヌス『告白』第十一卷、第十四章 (Augustinus: *Confessiones*, N. 14.) を参照。
- (6) Aristoteles: a. a. O. 218 a 33-218 b 1.
- (7) 周知のとく、プラトンは『チャイオス』のなかで、かれの時間論を展開している。そこでプラトンは世界創造説を説くに際して、まず世界の創造者 (*δημιουργός*) によつて天体が創造され、この天体運行の始動とともに、不動にして一なる永遠の本性を原型としてあたうかぎりこれに類似するようた、永遠に持続し数によつて数えられる時間が生み出されたといっている。プラトンによると、天体の創造とともに、一日に一回転する天体の運行により、それまでは存在しなかつた日・夜・年・月がここにはじめて生じたこととみられ、それゆゑ時間は天体の運動 (*ἡ τῶν ἀστροκίνησις*) であり、また永遠なるものの動く影であるとみられることとなる。(Platon: *Timaeus*, 37c-38e.) この点から推測するに、アリストテレスが先人の見解として紹介した説のうち、天体(全宇宙)の運動をよつて時間であるとした説は、プラトンの『チャイオス』における時間論を指すものとみられる。(W. D. Ross: *Aristotle's Physics*, p. 596.)
- (8) cf. W. D. Ross: *Ibid.*, p. 596.
- (9) 因ら古代の原子論的唯物論者デモクリトスは、われわれの宇宙のほかにも多数の宇宙が存在するとい説いた。

- (10) H. Diels : Die Fragmente der Vorsokratiker, Bd. 1. S. 355.
- (11) Heidegger : a. a. O. S. 333.
- (12) アリストテレスによると、時間は「運動の数」と定義されるが、この場合の数は数えられるもの、それも抽象的ではなく、具体的に数えられるものを意味するものである。ところで、時間が「運動の数」であるとすると、それではない時間はいかなる種類の運動の数なのか、という疑問が生じてくる。なお、この問題にかんしてアリストテレスは、このあと第十四章 (Phys. 223 a 30 ff.) に答えてくれる。つまりこの点にはふれないでおく。
- (13) W. Bröcker : Aristoteles, III. Kap. S. 102.
- (14) この箇所原文の語句を理解することは、いささか容易ではない。まず *ἡ νόσος* なる箇所は、とりあえず前掲の岩波版「全集」の邦訳にしたがって「その当のものとして」という訳語をあて、これによって理解した。因にこの箇所は、ロス英訳で *in respect of its substantiality* と邦訳とは同じ意味に把握されている。cf. W. D. Ross : Ibid., p. 386. (このほか *ταύτα* was *jewellen das Seiende ist* と訳している *ὅτι* cf. W. Bröcker : a. a. O. S. 104. ff.) なお本稿では、これを *braktisusou* と解することにより、上記の訳語に加えて「基体的存在」という訳語を併記しておいた。つぎに *τὸ εἶναι αὐτῷ* についても、さしあたって「そのどうあるか」という訳語にしたがってこの箇所を理解した。ともあれ、このところは、ひろい意味でどうあるのかそのあり方をいったもので、たとえば「市場にいる」とか「健康である」などのように、いわば規定されてあるあり方を意味しているようにみえる。さきの「基体的存在」は、規定という点ではむしろ無規定にちかく、いわば質料的というか、ともかく漠然たる存在を意味しているといつてよい。そこでこれに對比して、この後者の箇所は、さしずめ「規定的あり方」と解することにより、この意訳を併記しておく。
- (15) この *τὸ φερόμενον* というのは、*phorō* (運ぶ) という動詞の受動相分詞で、文字どおりの意味にとれば、「運ばれているもの」ないし「移動しているもの」となるうが、ここではよくふんひろい意味に受けとって、「運動する当のもの」あるいは「運動する当体」とした。因にロスの英訳では *the moving body* となつて *cf. W. D. Ross : Ibid., p. 386.*
- (16) かつてソフィストたちは、「リュケイオンにおけるロリスコスと市場におけるロリスコスとは異なる」ということによつて、同一のロリスコスなる人物が他に存在しないことを主張した。この論証の弁は、なるほどいまい「規定的存在」という点においては正しいが、しかしアリストテレスのいわゆる「基体的存在」と「規定的存在」とを無差別にもちいて、しかも後者においてのみいわれる差異性をもつばらその基体はまだ適用して結論したために、詭弁におちいっている。一見その誤謬なることはあきらかで、ロリスコスはリュケイオンにいうと市場にいうと依然としてロリスコスに変わりはない、すなわちロリスコスという「基体的存在」として同一だということである。

(17) ハイデッカーの指摘のように、アリストテレスは、時間の本質を「今」のうちに見、「今」を限界と解し、さらに「今」を「このもの」(εἶδος)とみており、同じくヘーゲルもまた「今」を「絶対のこれ」(absolutes Dieses)とみている。ところで、ここにいわれる「今」にかんする両義性は、それぞれ別々に考えられるべきでなく、むしろ互いに他方を前提してはじめて具体的な「今」として成り立つものといえる。すなわち、常に他でありながらも同一であり、また同一であってしかも異なるこの両者の統一を介して、全き具体的な「絶対のこれ」としての「今」がえられるといえるであろう。(vgl. Heidegger: *Sein und Zeit*, S. 432.)

〔付記〕 本稿は、昭和四十九年度法政大学特別研究助成金の交付による研究成果であるとともに、筆者による「西洋哲学における時間論の研究」の一部をなすものであることを書きそえておく。